うつのみや 歴史民俗紀行 第15回

室町時代の最先端の絵画様式を関東にもたらした画僧・祥啓

栃木県立博物館 学芸員 深沢 麻亜沙

美術の歴史の中には、「関東水墨画」と呼ばれるジャンルがある。この用語自体は古くからあるものではなく現代の言葉だが、意味としては、「関東の水墨画」ではなくて「室町時代に京の都から東国にもたらされ広まった中央様式の絵画」のことを指す。つまり、当時の文化の中心地であった京都から関東地方に中国由来の本格的な水墨画が伝えられ、その系統に属する絵画が「関東水墨画」ということである。その、当時最先端の絵画様式を関東に伝えたのが、宇都宮出身の祥啓という画僧であった。

『本朝画史』という延宝六(一六七八)年に刊行された日本画家伝によると、祥啓は宇都宮の丸良氏の出で、鎌倉の建長寺で書記として活躍した。ちなみに、史料に登場する最初の宇都宮出身の画家である。文明十(一四七八)年と明応二(一四九三)年の二度にわたり上洛し、足利将軍家に仕えていた芸阿弥に師事した。なお、現在東京の根津美術館に収められている芸阿弥筆「観瀑図」は、祥啓が最初の上洛から帰郷する際に芸阿弥から贈られた品である。上洛中、絵の才能を認められた祥啓は将軍家所蔵の御物の閲覧を許可されてそれらを写した。足利将軍家は唐物を好んでいたため、御物には中国絵画が多くあり、祥啓はそれらから本格的な絵画様式を学び関東の地にそのスタイルを持ち帰ったのである。

祥啓筆「山水図」
室町時代(16世紀)
(栃木県立博物館蔵)

祥啓筆「渡唐天神図」
室町時代(16世紀)
(栃木県立博物館蔵)

祥啓がもたらした絵画様式が広く受け入れられたことは、祥啓の弟子とみられる画家たちが描いた多くの作品から理解される。啓孫、啓牧、啓宗といった名前に「啓」字が用いられている画家や、性安、興悦、興牧などは祥啓の弟子と考えられている。とくに性安は、常陸太田(茨城県)の耕山寺に住み、同じく常陸太田の正宗寺で修行していた雪村に絵を教えたという。雪村は個性的な作品を多く遺しており、明治時代には岡倉天心から高い評価を受け、今も一定の人気を集めている。そんな雪村が祥啓の系譜に連なる画家であったことは、どのくらい認識されているだろうか。

関東水墨画作品は、決して彩色鮮やかで華やかな絵画ではない。ただ、墨を基調に淡彩をわずかに入れることで、墨の濃淡が見せる厳かな世界がより美しいものに感じられる。作品を前に、これが足利将軍が求めた絵画スタイルなのかと思って眺めると、その当時の人々の好みが見えておもしろい。祥啓が関東に広めてくれ、作品が今も伝わっていることで、現代の私たちは宇都宮にいながら、室町時代の都の人々の精神世界に近づくことができるのである。